

「わたしたちは主のもの」

イザヤ書 第45章22節～25節
ローマ人への手紙 第14章1節～12節

説教 岡村 恒牧師

「わたしたちは主のものなのである」。(8節)今朝の御言葉は明解に語ります。《わたしは誰。どこから来て、どこへ行くのか》という問いは、私たちにとって最後の究極の問いなのです。地震や身近な者の死に直面しなくても、人生の歩みの中で繰り返しこの問いが問われるのです。

ローマ人への手紙の後半部分には、信仰共同体における倫理的な教えが記されています。今朝の箇所には、様々な考え方や多様な宗教的習慣を抱えた教会の現実が描かれています。しかしよく読んでいくと、ただ単に、隣り人の考え方や習慣を尊重しましょう、といった教えが書いてあるわけではないことが分かります。

今朝の聖書箇所には、元の言葉では《主》という単語が、14回も出てきます。「日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。そして、神に感謝する」。(6節)といった調子です。8節も元の言葉の順番に直訳すると《主に、われわれは生き、主に、われわれは死ぬ》ときわめて単純に記されています。余分な説明など一切必要ないのです。このわたしはいったい何ものか？という問いにだけ答えるのです。

生まれて間もないキリスト教会には、ユダヤ教の伝統の中で育った者とそうでない者、他の宗教的習慣を身につけて生きてきた者など、さまざまな人々が共に歩んでいました。食事や祝祭日に関する決まりごとなどを、それぞれが確信を持って大切に生きてきたのです。ひとりひとりが、自分を自分の人生の主人として生きる時、それぞれの決まり事が決定的なこととなります。お互いを非難し合ったり、さばき合うこととなります。そこで聖書は問うのです。「他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか」。(4節) あなたの人生の主人はいったい誰なのか、と問うのです。

創世記の冒頭部分には、神が天地を創造された後、満足して安息されたことが記されています。ユダヤ教では今日でも《安息日(あんそくにち)》を大切に、この日には一切の労働をしません。神の創造のみ業と安息とを覚え、神にだけ一切を集中して1日を過ごすのです。しかし最初の人アダム以来、私たち人間は神の満足を損なうように歩んできました。ですから、主イエス・キリストの十字架での死と復活は、私た

ちすべての者を新しく創造する出来事だったのです。神は、終わりの日に本当の満足を味わい、私たちに完全な安息を与えて下さるために、主イエスをお送り下さいました。

主イエス・キリストを信じる信仰を与えられ、主イエスに結びつけられたキリスト者は、本当の意味で《生きるもの》とされます。天地創造の日に、神がその息を鼻に吹き入れて下さり、地の塵で造られた人間は生きる者となりました。(創世記 2章7節)主イエスを信じる信仰を告白して洗礼を受けた者は、新しい息である聖霊を吹き入れられて生きるものとなります。死から引き上げられ今も生きておられ、やがて再び来て下さる主イエスが、信仰者を主ご自身のものとして生かし、支えて下さるのです。

『ハイデルベルグ信仰問答』とう書物は、唯一の慰めについてこう語ります。《問 生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは何ですか。》 答え 《わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることであります。》

キリストが私たちのために「死んで生き返られた」(9節)以上、私たちは確かに主のものなのです。やがて終わりの日、神のさばきの座で、主イエスご自身が私たちのために《これはわたしのものだ》と言って下さるのです。

洗礼を受けた後の人生は、《エピローグ(あとがき)》だと言われます。洗礼によって主イエスのものとされた時、私たちの人生が完結するからです。いつ地上の旅が終わっても、いつ世の終わりが来ても良いように、準備が整ってしまうからです。そしてその後の人生は、神によって特別に与えられたエピローグです。神の恵みを証言し、神をほめたたえ、神がどのようにこの身と魂とを主のものとして下さったかを語りながら歩む日々となります。

やがて終わりの日、イザヤ書45章が語るように、すべての者が主を讃美する時が来ます。主のものとして生き、やがてその日、主のものとして神の前に立つ、その喜びの時を待ち望みながら歩みましょう。

(岡村 恒)